

日本古典文学講座を終えて

2008年の「源氏物語千年紀」を前に、「源氏」への関心が高まる中、2004年1月に「日本古典文学講座」を開講して10年、此の3月で本講座を終えました。その間に取り上げた作品は、「源氏物語」「大鏡」「平家物語」「枕草子」でした。受講者に多少の変動はありましたが、大体20～25名。その2/3が女性でした。

美術や音楽においては古典がむしろ愛好されるのに、何故か古典文学は、本好きの方も「ノー・サンキュー」が多いようです。それは文学が直接感性に訴えるものではなく、言葉という伝達手段に頼らねばならない事にありましょう。古文といえば、先ず単語が判らない、文法が難しいからと食わず嫌いで避けてしまうのは残念です。長い時代の波に洗われながら生き残った作品には、それなりの人の心を動かす力も魅力もあります。

JASSの講座は、古典を読んでみようかという余裕を持たれた方々へ、古典世界の多彩さ・面白さをご紹介したく、開講しました。

最初に取り上げたのは、折柄の源氏ブームの中で「源氏物語」でした。古典文学の魅力も、難しさも詰まった作品です。「源氏54帖」、1ヶ月・1帖のペースで解説・読了したのですが、「原文を読みたい」という御要望で、私見で選んだ箇所を全員で朗読したのは、思いがけず楽しいものでした。名作に接する醍醐味は、そのテーマ性と共に文体にあります。声に出して読むことによって、文章のニュアンスやリズム感、作者の息づかいを感じる事が出来ます。(眠気防止という思わぬ効果もありましたが・・・)初めは全員勝手読みで、なかなか揃うところまではいきませんでした。

元アナの経験から、私なりに朗読の要諦は「間合いの取り方」にある、それは「読んだ文章を腹の底にいったん収めて、一息ついて次の文章を読む」に尽きると、実にアバウトな指導をしましたが、10年経って、皆様、こつを会得し、ゆっくりと自然な読みの中で、大層上手になっていらっしゃいます。

また、作品の中で動き、生活する人々を身近に

感じていただきたく、立体化して読むことを心がけました。男女貴族・武将の装束や、舞台となった場所と其処での彼らの動き等は、参考資料で図解して説明しました。取り上げた4作品、それぞれの中で、其の時代の其の時をヴィヴィッドに生きている人々の姿を、一つの舞台上のドラマとして、各自の心の中に組み立てて味わって欲しかったからです。

かつて、古文の泰斗・秋山虔氏の講義を受けた中で「現代語は痩せている」と仰った言葉が、今も心に残っています。論理性に重きを置き、不明瞭さを極力排する為には、単語の意味を単純化させることは必要です。言語の力が機能性に重きを置くようになってしまった現代、その現代語に訳して読むのは返って古文の味わいを損なうと、殊に感性・感覚を表す語については、基本的な意味を説明して(例えば「あはれなり=深い感動・情感を表す」)、前後の文章のニュアンスからご自分の感性の中で受け取って欲しい、古語の持つ曖昧さを、豊饒さと捉えて欲しいと、自由度を残した半端な訳し方でした。幸い皆様、豊かな人生経験の中で言葉の達人ばかり、その辺りの意、私流の読み方をご理解下さり、休憩時間には、当時の人々の生活習慣への素朴な質問や、古典に関するホットな新聞記事の切り抜きの持ち寄り、作中人物に対する感想等、和気藹藹、古文を身近に引き寄せて楽しんでいらっしゃいました。

此の後も、日本の風土が育くんだ感性や、古人の生き方に思いを馳せつつ、忙中の彩として、古典を楽しんでいただけたらと願います。

「どうしても源氏物語を読み終えたかった」と、御身体不調の中お運び下さった方々、この10年、つたない講義を励まし支え続けて下さった方々、終えるにあたって万感の思いがあります。

お世話下さった伊藤武典氏のお力添えにも深く感謝申し上げます。

記 村上雅子

